

Death of a Salesman 論

—— 劇的時間と Ben の役割を中心に ——

徳 永 哲

1. 《現在》と《回想場面》

Arthur Miller の *Death of a Salesman*¹⁾ は主人公 Willy の頭の中を再現しているために《現在》と過去の《回想場面》が交錯する二重構造になっている。《現在》の行動は第一幕では Willy Loman の家の中と裏庭に限定されており、第二幕では第一幕と同じ家の中から始まって Wargner 社のオフィス、Charley の会社のオフィス、Stanley のレストラン、そして再び家の中へと移り変わる。

《回想場面》として再現された Willy の頭の中で渦巻く過去の出来事は、《現在》場面と複合、交錯され、Willy の実像と今日の状況に至った要因を浮き彫りにしていく。Willy の存在が閉塞した外的要因として、アメリカの偉大な時代が大きな転換期を迎えていたことや不景気の波が襲ってきて、売上がうまくいかなかったこと、また、めまぐるしく移り変わる現代文明と現代人気質などがあげられている。内的要因として、彼の性格の弱さ、虚栄心、要領の悪さ、常軌を逸した教育観などがあげられる。

第一幕の《回想場面》は《現在》と舞台上に明確に提示された約束事ではっきりと区別できるようになっている。Loman の家は骨組みだけの構造になっており、家の壁はすべて取り払われている。《現在》の場面では、演技者たちは壁を突き抜けて歩くようなことはしない。観客は演技者たちの演技動作によって壁が存在することがわかる。しかし、《回想場面》になると Willy の想念の世界が展開されるので、空間的な壁に限らず、時間的な壁さえも取り除かれる。Willy は家の壁を通り抜けて《回想場面》へと入って行く。

第一幕で《現在》の場面を現実的な固定された空間とするならば、《回想場面》は夢想的で変動的な空間と称することができる。その二つの場面は明確に区別できるようにできている。それに対して、第二幕では、《現在》の場面も変動的で、前舞台 (forestage) から張り出し舞台 (apron stage) が使われる場合が多く、舞台の左、右、前、奥へと移動していく。《回想場面》への移行の提示は対話を契機にわずかな小道具と照明効果に頼らざるをえない。しかも、二つの場面の転換は目まぐるしく、各場面での照明効果が醸し出す雰囲気は絶対に不可欠である。

2. Linda の存在意味

この劇は60歳を越えた Willy が出張販売を終え、夜遅く、疲れ果てて帰宅するところから始まる。彼はサンプルのいっぱい詰まった大きなカバンを2つ (two large sample cases)、重そうに床の上に置く。いかにも疲れたように首や肩をまわし、溜め息をつき、そして、なにやら独り言を言いながら、居間へカバンを運び込む。²⁾

Willy の頭の中には15年も前の、息子 Biff にまつわる出来事が去来し続けている。すでに過去のことであって、現在思い直したり、さまざまな疑問を解消することで、修復できるものではないのに、その出来事が彼の頭を中心に居座り続けており、現在はそれと強い紐で結ばれ、まるでコンパスで円を描くように、その周辺を回転しているのである。現在は将来への新たな希望へと続くものではなく、逆に、過去への求心力を強め、Willy の生を閉塞するのである。

妻の Linda は寝室から部屋着をまとい、「一日中どこへ行っていたの。(Where were you all day ?³⁾」と呼びかける。こういう呼びかけで夫を迎える家庭もあるかもしれないが、少々意外な感じもする。Willy と Linda との間の絆に一抹の陰りを予感させるのである。事実、Willy は、車に乗ってどこやら出掛けて行くのであるが、仕事らしい仕事はほとんどできずに、借金をしては収入があったかのように Linda にお金を渡している。Linda は知っていながら何も言わずに受け取っている。それが Willy への思いや

りだと思っているのである。こうした Linda の思いやりは、Willy が自殺しようとして地下室にゴムホース (little rubber pipe) を隠している⁴⁾のを知ったときにも、Willy に問い詰めたり、自分の手でゴムホースを捨てたりするには至らせない。彼女の思いやりは Willy を傷つけないということ、そして、Willy を救えるのは Biff だけだと説得することだけに終始しており、同伴者としての積極性に欠けている。⁵⁾ Linda の思いやり、すなわち、Linda 流の「愛」は Willy を救うには至らないのである。

この劇には最後にレクイエム⁶⁾が付いている。Linda の Willy の死を悼むセリフで締めくくられている。Willy と Linda の間には夫婦の記念となるものは、ローンの支払いが済んだということ以外に何も無い。Linda の繰り返すつぶやき「なぜそんなことをしたの。(Why did you ever do that?)」は結局 Willy との断絶の深さと空しい関係を知らされるだけである。劇が始まってすぐの Willy への Linda の呼びかけは、その断絶と空しい関係を象徴的に、また、予兆として印象づけている。

Linda を配して、Willy について語り部的働きをさせているのはこの劇の特色である。Linda のセリフは夫を立ち直らせようとする努力以上に夫を弁護し、語ることに集中している。子供の Biff や Happy に向けられる非難も、Willy の長年の努力と敗北者的な悲哀を語ることによってなされている。⁸⁾

取るに足らない人間だって、偉大な人間と同様に疲れるものなのよ。父さんは一つの会社にお勤めしてこの3月で36年になるんですよ。その長年にわたってずっと会社の商標も知られていない地方をまわっては商品を売り込んでいったんですよ。それなのに、こんな年になって固定給がもらえなんですからね。

A small man can be just as exhausted as a great man. He works for a company thirty—six years this March, opens up unheard—of territories to their trademark, and now in his old age they take his salary away.⁹⁾

Linda の役割は、子供を母親らしく愛するのではなく、Willy を弁護するこ

とであり、「取るに足らない人間 (a small man)」への社会的寛容や思いやりなどを主張することにある。そして、一人のセールスマンの悲哀をとおして、管理社会下の現代人の悲劇を、象徴的に、強烈に印象づけることにある。

再び、幕開きの部分で疲れ切った Willy が冷蔵庫を一人で漁り、疲れ切って食卓につくその姿には孤独な、やる瀬ない重苦しさが一杯に漂う。

Willy は外回りセールスにほぼ35年間従事してきたが、現在は結局、歩合給だけ (straight commission) のセールスマンになってしまっている。みんなに惜しまれながら死んでいった理想のセールスマン Dave Singleman¹⁰⁾ の生涯とはほど遠い存在である。家族に対しても、ひたすら、自己の能率の悪さや無能さをごまかし、思い上がりで見栄だけで面目を保ってきた。そして現在、自己の欠陥から引き起こされた様々な問題が一気に噴出する。子供の教育の失敗、自己の社会的モラルの欠如、浮気と浪費および家計に対する無責任などへの自覚と後悔、さらには職業の選択を誤ったのではないかという疑問など、彼の脳裏に海の波のように寄せては引き、また引いては寄せる。Willy は誰かに理解を求めるわけでもなく、孤立して不毛の、精神的砂漠を流浪する。まさに、彼は内なる放浪者である。舞台上の《回想場面》はまさに過去から寄せて来る波を実現したものなのである。

3. Ben の最初の登場¹¹⁾

この劇のストーリーは2つの線として考えられる。一つの線は Willy がセールスマンという仕事を始めて、家族を持ち、人生に大きな夢を抱いていたその時点から、生涯を閉じるまでの一貫した時間の流れである。それは Willy の《歴史》とでもいうべき時間の流れである。しかし、その《歴史》は客観的なものではない。行き詰まった Willy が回想のなかに新しく構築している、多くの虚構を内包する《歴史》なのである。特に Willy が創作した虚構と思えるのは《回想場面》の Ben の存在である。もう一つの線は「自殺」にはっきりとした目的と意味を見いだすまでの2日間の出来事である。

いずれの線も、Ben と Bernard が鍵となって交錯する。Bernard は Biff が卒業試験を放棄して突然ブルックリンから姿を消してしまったことへの原因究明の鍵を握っているにすぎないが、Ben は Willy の存在そのものに関わる。Ben は《回想場面》の中に2度、そして《回想場面》でない劇の最後場面に登場する。¹²⁾

最初の Ben の登場。その登場の仕方には非常に技巧が凝らされている。隣人の Charley が、Willy と Happy の口論を聞いて、寝間着のままと飛んで来て仲裁に入り、Willy をなだめる。Willy と Charley はトランプを始める。¹³⁾ 二人の対話の最中に Ben のセリフが巧みに割り込んで来る。旅行鞆と雨傘を持った Ben の姿が前舞台のスポットライトの中に照らし出される。¹⁴⁾ 彼は時計(watch)¹⁵⁾を見つめている。Willy は Charley とトランプをしながら、Ben に話しかける。Willy の頭の中は肉体以上に疲労している。疲労は限界を超えており、現実と幻想の間の境を見失っている。Charley は Willy の疲労を知っているので気分転換にトランプを誘ったのだが、それで癒される程度のものではない。この Charley と Willy の対話は、それとは別に、ある事実を暴露している。それは Willy が事実上職を失っていて、Charley が新しい職を見つけてやっておりその職を勧めていることである。Willy はそれを断っているが、Willy の失職は Ben の登場を待ち望む Willy の心境に暗示的ではあるが深く関係している。いずれにしても、《回想場面》への転換はまず Willy の「疲労」と頭の中の混乱からなされていくのである。

《回想場面》で、アラスカに戻る途中にブルックリンに立ち寄った Ben と、Willy は感動的な出会いをする。Willy は3歳のときに会ったきりで、以来会っていなかったが、そのときの場所サウス・ダコダの農園風景をしっかりと覚えている。Ben と Willy の最初の対話では東海岸の大都市とは対照的な中西部の大農園地帯からアフリカでのダイヤモンド鉱脈の発見に至るまで、自然と人生にロマンスを求めた男の生き方が語られている。また、Ben の語る父親像はフロンティアを求める自由人で、しかも偉大な発明家(Great inventor)である。しかし、その父親がどういう職業であった

のか、また、Ben が起こした事業は何だったのか、明確にされることはない。Willy の頭の中ではそうした事実というものはどうでもよいことなのであろう。男に欠かせないもの、それは職業ではなく、夢であり、ロマンチックな体験なのである。それらを追い求めて生きる生き方こそ大物になれる資質なのである。Willy はその資質を子供たちに持たせたいと願っていた。

Willy の教育観には大きな欠陥があった。というのも、男の子には夢を持たせたり、ロマンチックな体験をするように励ましたりすることは教育の大切な役割であるのだが、それ以上に、成功への苦勞と努力を教えることのほうがはるかに大切なだけだからである。Willy は人生においてどのような生き方をしても必ずそこにはなくてはならないもの、すなわち地道な努力と苦勞であるが、それらを自己の教育観から切り捨ててしまっているのである。その根本的なものを教えられ、悟ることのできなかつた Biff は夢だけをただ追い求める宙ぶらりんの放浪生活をおくることになってしまった (“I spent six or seven years after high school trying to work myself up. Shipping clerk, salesman, business of one kind or another. And it’s a measly manner of existence. To get on that subway on the hot mornings in summer. To devote your whole life to keeping stock, or making phone calls, or selling or buying. ...”¹⁵⁾) のである。

いつまでも定職に就こうとしないで渡り鳥のような生活を送る Biff に対して Willy は自分の教育がこれでよかったのか、疑問を抱くようになった。しかし、Willy にしてみれば、いまさら自分の教育が間違っていた考えたくはないであろうし、そう考えたところで Biff が更生されるわけでもない。Willy の Biff に対する親子の愛は今も強くあるのだから、そのことがかえって Willy を不条理な怒りへと駆り立てるのである。Ben の出現はまさにその疑問を一掃し、生き方や教育が間違いなかったことを再確認し、正当化するためであった。

Ben は次のように答える。

ウィリアム、お前の子供は第一級品だ。素晴らしい、男らしい子だ。

(William, you're being first-rate with your boys. Outstanding, manly chaps !⁶⁾…ウィリアム、わたしがジャングルに入って行ったときは17歳だった。出て来たときは21歳だった。そのとき、わたしは金持ちになっていた。(William, when I walked into the jungle, I was seventeen. When I walked out I was twenty-one. And, by God, I was rich !)¹⁷⁾

その返答に Willy は熱狂して言う。

それですよ、わたしがまさに子供たちに吹き込みたいと思っている魂は。ジャングルに入って行く。わたしは間違っていなかった。

(…was rich ! That's just the spirit I want to imbue them with ! To walk into a jungle ! I was right !)¹⁸⁾

Ben はほんとうに実在したのだろうか。実際のところ、その後の文脈からも過去に Ben がどのように存在したかは不明である。Willy がよく言及する Ben の父はゴールドラッシュと関係があるようでもあり、西部開拓時代に生きていたようでもある。また、Ben もゴールドラッシュと関係があるようでもあり、大資本家が台頭した第1次世界大戦前のアメリカに生きていたようでもある。Ben と父の二人が生きた時間はアメリカの歴史の大部分といえるほどの長さを印象づけており、実在の真実は測り難いのである。

おそらく、Ben は第1次世界大戦前あたりに、アラスカで事業に成功し、成り上がった大資本家であろう。それもあくまでも推測の域を出ない。Willy は、Ben に、古き良きアメリカの開拓時代に実在したかもしれない英雄を重ね合わせているようである。したがって、Ben の言動の多くは、Willy が自分に都合のよい回答を引き出すための Willy 自身の虚構が大部分なのであろう。家族や社会との絆を喪失した孤独な老セールスマンが、さまざまな問題を自己の内だけで決着しようと、自己の内に創造した架空の相談相手といえるのではないだろうか。

4. 2度目の Ben の登場¹⁹⁾

2度目の Ben の登場は第2幕の Willy と Howard の会見の場面の後である。

Linda の心配と強い要望から Willy は、Howard に、高齢と疲労を理由にニューヨーク本社内勤への転勤を申し出るためにオフィスへやって来る。しかし、外回りセールスが会社の主力である(“But you’re a road man, Willy, and we do a road business.”)²⁰⁾という理由で断られる。とはいえ、Willy に外回りはもう不可能なのである。全く取り付く島もなく断られてしまったことに腹を立てた Willy は、自己の立場も忘れて大声で「食っていくにはどうしても週50ドルいるんだ (Howard, all I need to set my table is fifty dollars a week.)」と要求する。²¹⁾その後、語気を荒立てながら先代の社長との間にあった話、それはどこまでが真実で、どこまでが虚構なのかは判らないのだが、さらに自分が Howard の名付け親であることを持ち出し、自己の存在をアピールする。しかし、Howard の少ない言葉の中に、Willy の過去の業績が本人が言うほど上がっていなかったことが暗示される。興奮した Willy は、商品が売れる売れないの問題ではなく(“Look, it isn’t a question of whether I can sell merchandise, is it?”)²²⁾、「感謝の気持ち (gratitude)」や「仲間意識 (comradeship)」を雇用の条件として持ち出す。²³⁾しかし、Howard は「商売は商売だ。(Business is business.)」「どうしても無理なことは無理なんだよ。(I can’t take blood from a stone.)」と突っぱねてしまう。²⁴⁾ Willy は「オレンジの中身だけ食べて皮はぼいと投げ捨てるのか、…人間は果物じゃないぞ (eat the orange and throw the peel away. ... A man is not a piece of fruit.)」と怒鳴る。²⁵⁾

ワイヤー・レコーダー (a wire-recording machine) などの小道具の扱いをめぐって、Willy の孤独と悲哀は、その機械が発する騒音とは対照的に、まるで音のない深淵に突き落とされたかのように深まる。時代の変化についていけないということが、社会的な敗北者にとってこうも無残で寂しいものなのか、見せつけられるのである。Willy は時代に、社会に、そして自分の人生にすら取り残されてしまった。しかし、人生だけは征服しなければ

ばならない。それには Willy Loman という一個の人間としての、父親としての、夫としての存在がかかっているからである。Willy は最後の賭けに出て、なんとしてでも成功させねばならないのである。

2 度目の Ben が現れ、「賭け」へ誘いをかける。²⁶⁾

Howard の会社を首になった Willy はセールスマンという職に執着した自分が選択を誤っていたのではないかという疑問が噴出する。Willy が大工仕事が上手なことは所々に明らかにされており、畑仕事もよくすることがほのめかされている。Willy は自然を相手に体を使った、細かい神経を使う農業などのほうが向いていたのかもしれない。Biff はそうした性向を受け継いでいる。都会的な、洗練された交際能力を必要とするセールスマンの仕事は向いていなかったのかもしれない。Ben のアラスカへの「誘い」に対して、Willy の戸惑いはセールスマンという職に対する疑問の表れであろう。

Willy が「リンド、彼がアラスカに職をみつけてくれたんだ。(Linda, he's got a proposition for me in Alaska.)²⁷⁾」と言ったのに対して Linda は次のように言う。

(ベンに) 夫はここで素晴らしい職についているのです。…夫をアラスカへ誘ったりはしないでください。この土地で、今、十分幸せなんですから。(ウィリーに向かって、一方ベンは笑っている) 誰もみんな、何故世界を征服しなければならないの。あなたはとても好かれているではありませんか。子供たちもあなたが大好きです。(ベンに向かって) ワグナー社長は夫が頑張っていれば、いずれ正社員に成れるって、つい先日おっしゃってくれたんですよ、そうでしょう、ウィリー。(He's got a beautiful job here. ... Don't say those things to him ! Enough to be happy right here, right now. [to Willy, while Ben laughs] Why must everybody conquer the world? You're well liked, and the boys love you, and someday [to Ben] why, old man Wagner told him just the other day that if he keeps it up he'll be a member of the firm, didn't he, Willy ?)²⁸⁾

Benの「誘い」にLindaが立ちはだかったことがほめかされている。「人に好かれること (to be liked)」はWillyのモットーであったので、Lindaのそのセリフには疑わしい面があるのだが、いずれにしても、Willyが「せいうち (walrus)²⁹⁾」とバイヤーに馬鹿にされながらも、セールスマンの職に執着したのは愛する「家族」があったためであり、Benや彼の父がしたように、明日知れぬ世界へ家族を引き回すというようなことはできなかったからであろう。結局、Willyはコモドール・ホテルで行われていた取引を引き合いに出して、アラスカへの「誘い」を断ってしまう。

しかし、その後Benの「誘い」は違った意味をもって来る。《現在》のWillyの希望あるいは夢の実現への「誘い」となるのである。

玄関開ければそこは新大陸だぞ、ウィリアム。さあ、歩き出して金持ちになるんだ。

(There's a new continent at your doorstep, William. You could walk out rich.)³⁰⁾

その「誘い」に対してWillyは次のように答える。

わたしはここでやり遂げるんです、ベンさん。(We'll do it here, Ben.)³¹⁾

「ここで (here)」金持ちになるとはどういうことを意味しているのだろうか。それは《過去》の彼がまだ若いころのブルックリンを指しているように偽装された《現在》の閉塞状況を打ち破る最後の賭けへの決断なのである。すなわち、自殺をし、多額の保険金を家族に残す決心なのである。

その後、《回想場面》はWilly一家そろってエベット・フィールドへBiffを応援に意気揚々と出掛ける場面へと一転する。³²⁾Willyはタッチダウンと叫びながら、街路へと出て行く。舞台は悪い夢でも見ているかのように各パートを転々としながら展開する。街路、そしてCharleyの会社の応接室。³³⁾そこで長年あっていなかったCharleyの息子Bernardに会う。Bernardは最高裁の法廷弁護士にまで出世している。かつて、ボールを盗んだり (“He's better give back that football, Willy.”), 女の子に乱暴を働いたり (He's too rough with the girls, Willy.”), 無免許運転をやったり

(“He’s driving the car without a licence !”) して³⁴⁾Bernard や Linda に心配をかけた Biff について, Willy は Bernard のように蛆虫のような人間に育てたくない(“You want him to be a worm like Bernard ?”)³⁵⁾と 言って Biff の行為を黙認していた。その「蛆虫のような人間 (a worm)」が立派に出世して, いま目の前にいるのだ。しかも, Bernard は今なお, Biff が卒業追試験を放棄して消えてしまった15年も前のことを気にしている。Biff の将来を台なしにしたのは外ならぬ Willy 自身であったことが暗示されるが, Bernard を目前にして取り返しのつかない深い後悔の念と贖いようのない運命的な悲哀が Willy を襲うのである。

Bernard と別れた後, Charley と会い, 彼に再就職を勧められる。しかし, Willy はそれに応じることができない。Charley も Willy と同じ普通の人間であるが, 正反対の生き方をしてきたのであり, 人生のモットーも正反対であった。Charley は Willy に対してそういう感情を抱いていないのであるが, Willy は敵対感情を剥き出しにすることがよくあったようである。堅実でごく普通に, 自然に, おおらかに生きてきた Charley とは対照的に Willy は賭博師的な, アウトロ一的な生き方を夢見ながら, そう生きれないその狭間であがいていた。男のもつべき夢を Charley がもっていなかったからである。しかも, 「賭け」は「ここで(here)」すると決心しているのである。Willy の Charley への敵対感情や見下し, あるいはプライドはそこからきていたのである。Willy は Charley から就職の世話をしてもらおうということはそのプライドが許すはずがない。「賭け」によって25000ドルが返って来るはずの生命保険の月々の掛け金110ドルなら借金することができる。それなら, プライドが許すのである。

5. 最後の Ben の登場と「賭け」

Willy は Charley のオフィスを出ると, Biff と会って食事することになっている Stanley のレストランへ向かう。Willy は Biff が Oliver との交渉を成功させた知らせに夢を託す。

しかし, Oliver 社の正社員セールスマンとしてではなく, 臨時雇いの発

送係として働いていたにすぎなかった Biff は Oliver に取り付く島もなく、自己幻滅を味わっただけだった。しかし、その場においても、Biff は、Willy が語っていた秘書に取り入ってバイヤーとの取引を有利にする商談のやり方を見事に踏襲していた。

僕を取り次いでくれるように秘書にデートの申し込みをしようとしたのだけれども、断られてしまった。(Even tried to date his secretary so she'd get me to him, but no soap.)³⁶⁾

しかも、それを断られ、待たされた腹いせに Biff は Oliver の「万年筆」を盗んで帰ってきたのである。³⁷⁾ Biff の泥棒はそれが初めてのことでなかった。子供のころは、学校からフットボールを盗んできたり、工事現場から角材を取ってきたりした。社会人になっても、この泥棒癖のために会社を辞めさせられては仕事場を転々としていなければならなかったのである。しかし、その悪癖が改善されなかった責任の一端は Willy にあった。彼は Biff の子供のころその悪癖を黙認、時には奨励するような教育をしていたのである。Willy の無責任な、誤った教育は Biff の〈人生〉を左右する要因となっていたのである。突如、Young Bernard の「ビフは数学が落第ですよ。(Biff flunked math!)³⁸⁾」という大きな声が、一瞬《回想場面》に変わった薄暗いレストランに響き渡る。

しかし、Biff の人生を左右した決定的出来事は Bernard のセリフが示唆しながら空白箇所(サスペンス)として残されてきた。それは、Willy が Biff と Happy に置き去りにされたレストランのトイレの中で明らかにされる。酒に酔った Willy がトイレに入るとそこは《回想場面》の、ニュー・イングランドのホテルの一室に変わる。³⁹⁾ 彼は下着姿の Woman と一緒にいる。そこへ数学の卒業試験に失敗した Biff が飛び込んで来る。Biff は Willy の浮気の現場を目撃してしまった。しかも、Willy が Linda がほつれを繕っては大切に使っていたストッキングを 2 箱も Woman にプレゼントしたことを知った。彼は「おまえは母さんのストッキングを女にやってしまったんだ (You gave her Mama's stockings!)⁴⁰⁾」と父親を罵ってしまう。深い心の痛手を負った Biff はその後ブルックリンから姿を消してし

まったのである。それ以後 Willy は Biff への負い目あるいは罪悪感を抱き続けてきた。自己の教育が正しかったこと、また自己の存在が偉大であったことなどが証しされるのである。しかし、それは大きな「賭け」の成功によって贖われると Willy は確信するそればかりではない。

裏庭を耕し、ニンジンなどを植える。そして、Ben を待つ。まさに劇の最終場面で Ben は 3 度目の登場をする。Willy は Ben に誘われ、最後の「賭け」へと出掛けて行く。

ジャングルは暗いが、ダイヤモンドで一杯だ。(The jungle is dark but full of diamonds.)⁴¹⁾

Ben は既に過去の思い出の中に存在する人物ではなくなっている。この《過去》の人物が遠い、時間の隔たった昔から、時間を急速に進ませ《現在》へ迫り、ついには《現在》に存在するようになった。この時間の切迫がこの作品の劇的緊張を維持させ、さらに高めたと言えるかもしれない。Ben が《回想場面》で登場するとき、彼はいつも、懐中時計を取り出し、時間がない(“I’ve only few minutes...”)ことを主張していた。そして、「賭け」に出た最期のときも時間が切迫している (Time, William, time !)⁴²⁾ ことを説いた。Ben は劇的時間の進行のうえに非常に大きな役割を担っているのである。

註

- 1) テキストは *Arthur Miller's Collected Plays* (Viking, New York, 1957) に所収の *Death of a Salesman* (p.129-p.222) を使った。以下はそのテキストの頁数を示す。
- 2) p.131
- 3) p.131
- 4) p.165
- 5) p.165
- 6) p.221-2
- 7) p.222
- 8) p.161-6

- 9) p.163
- 10) p.180
- 11) p.154-160
- 12) p.212-220
- 13) p.152-4
- 14) p.154
- 15) p.138
- 16) p.159
- 17) p.159-160
- 18) p.160
- 19) p.183-4
- 20) p.179
- 21) p.179-182
- 22) p.179
- 23) p.180
- 24) p.181
- 25) p.181
- 26) p.183
- 27) p.183
- 28) p.183
- 29) p.149
- 30) p.184
- 31) p.184
- 32) p.185-6
- 33) p.187-193
- 34) p.151
- 35) p.151
- 36) p.196
- 37) p.201
- 38) p.201
- 39) p.203-7
- 40) p.208
- 41) p.219
- 42) p.219

参考文献

- Schlueter and Flanagan, *Arthur Miller*, Ungar, New York, 1978.
Harold Bloom (ed.), *Willy Loman*, Chelsea House, New York, 1991.